

世界の宗教と死刑について

JJ1SXA/池

今、世界宗教とみなされている宗教はキリスト教、イスラム教、仏教のようだが、これに、ユダヤ教、ヒンズー教を加える場合もある。

キリスト教は、ナザレのイエスをキリスト(救い主)として信じる宗教だ、イエス・キリストが、神の国の福音を説き、罪ある人間を救済するために自ら十字架にかけられ、復活したものと信じる。

カトリック教会・聖公会・プロテスタント・正教会・東方諸教会等の多くは「父なる神」と「その子キリスト」と「聖霊」を唯一の神(三位一体・至聖三者)として信仰し、世界における信者数は22億人を超えており、すべての宗教の中で最も多いそうだ。

イスラム教は、唯一絶対の神(アッラー)を信仰し、神が最後の預言者を通じて人々に下したとされるクルアーンの教えを信じ、従う一神教で、漢字圏においては回教とも呼ばれる。

ユダヤ教やキリスト教の影響を受けた唯一神教で、偶像崇拝を徹底的に排除し、神への奉仕を重んじ、信徒同士の相互扶助関係や一体感を重んじる点に大きな特色があるとされる。

アッラーとは、もともとアラビアの多神教の神々の中の一柱であったが、ムハンマドがメッカを占領した際、カーバ神殿に存在した全ての神々の像を破壊し、多神教及び偶像崇拝を戒め、アッラーのみを崇拝するようになったとのこと。

仏教は、インドの釈迦(ゴータマ・シッダッタ)を開祖とする宗教であり、仏陀(仏、目覚めた人)の説いた教えである、そしてその教義は、苦しみの輪廻から解脱することを目指している、原因と結果の理解に基づいており、諸々の現象が縁起するとされる。

…以上は「Wikipedia」より…

旧約聖書によると、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の共通の祖「アブラハム」の一族はイラクにあるメソポタミアの故郷ウルからシリアのハランを経て、パレスチナのカナンに移ったということだ。

テラの子アブラハムは、文明が発祥したメソポタミア地方カルデアのウルにおいて裕福な遊牧民の家に生まれたと学者らによって考えられているが、テラは、その息子アブラハムと、孫でアブラハムの甥に当たるロト、およびアブラハムの妻でアブラハムの異母妹に当たるサライ(のちのサラ)と共にカナンの地(ヨルダン川西岸、現在のパレスティナ)に移り住むことを目指し、ウルから出発した、しかし、途中のハランにテラ一行は住み着き、アブラハムは、父テラの死後、ヤハウェ神から啓示を受け、それに従って、妻サライ、甥ロト、およびハランで加えた人々とともに約束の地カナン(パレスチナ)へ旅立った、アブラハム75歳の時のことである。

キリスト教の教義においては、救い主であるイエス・キリストが人類をその罪から救うために、身代わりに磔になったものとされるが、イエスは、エルサレム神殿を頂点とするユダヤ教体制を批判したため、死刑の権限のないユダヤ人の指導者た

ちによって、その権限のある支配者ローマ帝国へ反逆者として渡され、公開処刑の死刑である十字架に磔（はりつけ）になって処刑された。

十字架刑はその残忍性のため、ローマ帝国でも反逆者のみが受け、ローマ市民権保持者は免除されていた最も重い刑罰であった。

この時代の磔刑では十字架につけられて即死することは無かった、刑を受ける者は両手首と両足首を釘でうちつけられ、体を支えられなくなることで呼吸困難に陥って死に至ったのだ。

日本の江戸時代中期以降における磔は、磔刑と鋸挽きの場合に行われた、磔刑は関所破りや贖金作り、主人及び親を傷つけた場合等に適用され、鋸挽きは主人及び親殺しに適用された、受刑者は小伝馬町の牢屋敷から引き出され、付加刑として市中引き回しにされた。

磔刑の場合は引き回した後ただちに刑場へ向かい、鋸挽きの場合は、2日間地面から頭部だけ出した形で埋められて晒されてから磔にされた。

処刑は公開で行われ、牢内で罪を認めた後に獄死した者に対しても死体を塩漬けにして保存しておき、判決が出された後に磔が執行された。

磔刑の方法は、まず、刑場において地面に置いた磔柱に縄で手首・上腕・足首・胸・腰部を固縛し衣類を剥ぎ取り(槍で突き上げるために両乳房から脇腹を露出するよう衣類の一部を剥ぎ、剥いだ布を体の中央で束ねて縛る)、数人掛りで磔柱を立て、柱の下部を地面に掘った穴に入れ、垂直に立てた。

磔柱の形状は、男性用が「キ」の字、女性用が「十」の字で、男性用は股間部に、女性用は足の下に体重を支える台があった。このため男性は大の字の形になり、女性は十の形となって柱に身動きできないように固縛された。

検使の与力は執行の準備が整った旨の報告を受け、同心に命じて最期の人改めを行い、受刑者が本人であることを確認させる。

槍を構えた執行役の非人身分の者が手代の合図で2人、磔柱の左右に並び、最初は受刑者の目前で槍を交叉させた、これを「見せ槍」と称し、次に「アリアアリア」という掛け声ともに、槍でねじり込むようにまず右脇腹から左肩先にかけて受刑者を串刺しに貫き(穂先が肩先から一尺出るのが正式とされる)、次に左脇腹から右肩先へ貫通させ、その後は同様の手順で左右交互に槍を貫通させる。

受刑者は主に出血多量か外傷性ショックにより2、3回目の貫通で絶命したが、死後もこれを30回ほど繰り返した、槍の柄に血が伝わらないよう、突き通すたびに槍をひねり、藁で槍に付いた血を拭う、脇腹の傷口からは鮮血が吹き出し、内臓を抉られるので腸などの内臓や残留消化物などが掻き出され、凄惨な有様であったという。

西洋の磔刑とは死に至る過程・方式が全く異なり、事実上は槍による刺殺刑といえる、消化器から肺まで広範な臓器に損傷を与え、またしばしば槍が骨につかえたりする場合もある。

最後に長い熊手で罪人の鬣をつかんで顔を上に向かせ、槍を右から左上にかけて受刑者の喉に刺し通す(これを「止めの槍」という)、死体はその後3日間放置状

態で晒された後、非人が穴に放り込んで片付けた、このような凄惨な方法だったのだと知ったが、それでも、ほぼ即死させることから言えば、キリストの受けた磔刑より良かったのか。

死刑廃止は、世界の潮流で、日本でも死刑廃止論者が多いが、犯罪被害者にとっては、罪に対して余りにも軽すぎる刑が適用された場合、その不条理が被害者にとって第二のトラウマになるのは周知の事実である、情状酌量の余地の無い殺人を行った犯人が終身刑で生き続ける不条理は遺族にとっては終わりのない苦痛であり、死刑在廢の議論において殺人の被害者遺族は大抵死刑賛成である、殺人に対して執行される死刑は応報であり人権を軽んじていることには当たらない、遺族が明確に死刑を望んでいる場合に情状応報そのものを否定することは法の公正を著しく損なう。…死刑についてはこのような意見もあり、何となく理解できる。